

守永先生ご退任記念号発行に際して

学 長 大 坪 檀

私の経営学との本格的な出会いは、アメリカ、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校アメリカ(UCLA)経営学大学院に留学し、そこでR・M・バーンズ、H・クーンツの2教授に出会い指導を受けたことに始まる。昭和30年代の初頭、留学先のこの大学院にはアメリカの代表的な経営学関係の学者がこの教授陣を埋めつくしており、リーダーシップ論のタンネンバーン、ウィンシュラー、管理会計論のカレンブルック、戦略論・長期経営計画論のG・スタイナーなどの教授が西のハーバード大学経営学大学院と競い合って独自の理論を展開し、アメリカの経営学界、産業界経営者に大きなインパクトを与えていたのは今も記憶に新しい。

R・M・バーンズ教授はアメリカの近代経営学の父の一人、ギルブレースの直系の弟子、H・クーンツは「経営管理の原則」論で世界的な名声を博した学者で、この二人の教授から毎日の様に直接の指導を受け、経営学における学問の基本的アプローチを伝授された。これが、今日、私の分野の学問的アプローチ、取り組みを決めたように思われる。

私は、この両教授の代表的な世界的名著「動作時間研究」と「経営管理の原則」を翻訳出版し、今日の日本の経営学のベース作りに貢献したと自負しているが、この2冊の翻訳作業を通じて、先生の指導の意味、即ち“自分の学問研究の独自性”と“先達性”ということを実感したのである。この2書は訓古の書、解釈の書、紹介の書ではなく、独自の内容で、先達性に充満するもので、いち早く日本のみならず多くの国で翻訳された。両先生は常に独自の理論を展開することを強調され、その理論が実証的で、独創的、社会をリードするような有用なものであることの重要性も力説されていた。

ひるかえって、我が国の学者の取り組み方は従来より西洋文化の翻訳、伝達を中心に置いたものが多く、総じて、独自性に欠け、先達性がみられない。研究内容にはスケールが小さく職人的なチマチマしたもの、野心に欠けるものが多い。学者の中には、先人の研究の解釈、所論、訓古の学、を中心とするものがしばしば見受けられ、実証に基き、独自の理論を展開し、社会に向けた提言するスピリットが不足していることがよくある。マルクス経済学ではマルクスの、近代経済学ではケインズの、経営学ではバーナドの、著書の解釈、応用に満足している学者が未だにみられ、独自の経営理論を他に先がけて打立て、世界がそれに注目し、社会がこれを活用するということは稀である。

大いなる自我をこめて云うなれば、留学生に教えている学問の内容は殆んどが欧米のその受渡し、焼直しの伝達で、戦後50年たって留学生に何等独自の理論を提供出来ないおのれの不甲斐さに自らに憤りを感じることもすらある。

21世紀の開幕に当り、私は本学の教授陣が、最先端の教育を行う為に最先端の研究を行われることを切望し、その学問が実証的で、独自性をもち、先達性に富んだものとなり、教授陣のもつ、最先端の研究に参画、享受しようと本学に学生、社会の人がむらがるようになることを祈りたい。

守永誠治先生退官記念『環境と経営』の発行に当り、研究が単なる学問の学問とならないように心がけ独自でスケールの大きい有用な情報発信が社会に向け本学から行われるようになることを、そして、21世紀の幕開にあたり、新しい研究の取り組みがこの大学からまず始まることを切望します。